

## 閉会の辞

小島 毅

哲学委員会では毎年この時期に公開シンポジウムを主催しておりますが、これには共催として哲学系諸学会連合と宗教研究諸学会連合にご協力いただいております。シンポジウムのテーマにつきましても、この2つの連合に加盟している学会から提案してもらっておりまして、今回のシンポジウムは比較思想学会様から頂戴した企画をもとに哲学委員会で協議してこのような形になったものです。この場を借りて御礼申し上げます。

今日は4人のかたがたからのご報告と、中島さんからのコメントや来会のみなさまからの質問をもとに議論してまいりました。以下、個人的な感想を申し上げて閉会の辞に代えたいと存じます。

藤田先生については都合により後回しとさせていただき、小田先生のお話から申し上げます。中島さんのコメントにもありました、シャリーアと儒教の礼との比較は、私も以前から気になっております。日本では儒教というともっぱら『論語』で理解されていますけれども、実は礼の法典化による秩序体系でありまして、日本でも古くは律令の継受によって、近代においては国家神道の思想資源として受容されています。今日小田先生が強調なさった視点からイスラームについてもっとよく知ることは、私たち日本人自身の問題として切実なのではないでしょうか。

次に、小倉先生は日韓の対話と並んで、異なるパラダイム間の対話を問題提起されました。そして、慰安婦問題を例に、「現場から新しい人間観を打ち立てていく」ことを提言なさいました。私も朱子学を研究しておりまして、先生の朱子学観、たとえば「<文明>の貧弱化」というような評価（『創造する東アジア』）には違和感をいただいていたのですが、今日のお話には深く共感いたしました。

田辺先生からは、18世紀ヨーロッパのパラダイムチェンジに対してインド思想が与えた影響のお話がありました。これも中島さんが指摘していたように、カトリック宣教師たちの報告を通じて中国思想とりわけ朱子学の間観が、啓蒙思想など近代哲学の成立と展開に大きく作用したこと、単なる刺激や影響という域を超えていた可能性が、近年、井川義次氏の研究（『宋学の西遷』）などによって浮かび上がってきました。とすると、ユーロセントリズム、あるいはユーロユニバーサリズムとでもいうべき従来の哲学史理解は根本的な見直しが必要なのかもしれません。

藤田先生のお話のなかに「対立するものが互いを鏡として相互に映しあう」という表現がございました。この相互性こそが今後の哲学対話に必要なと存じます。再来年は明治維新 150 周年ですが、この間、日本は近代西洋文明を全面的に受け入れ、今日のシンポジウムもそうであったようにさまざまな対話の試みを行ってきました。これからは知の受容と創造の成果を世界に発信し、国外の人々にもそれを「映し」てもらふこと、そうして双方ともに変わっていくことが大事だと思うのです。古くはインド発祥の仏教や中国起源の儒教を韓国経由で、近代以降は西洋文明をと、さまざまな思想・宗教を受容してきたわが国は、そうした役割を果たすことができますし、その役割が求められてもいるでしょう。学術会議哲学委員会がそのために些かなりとも寄与できるように、小田先生が討論のなかでおっしゃっていた「異質なものの共生・共存」をめざして努力してまいりたいと存じます。

福島復興の問題についてのご質問をフロアから頂戴しました。福島、ひいては東日本大震災からの復興問題は学術会議全体としてこの5年あまり取り組んでいる大きな課題です。哲学委員会では、復興のハウツーではなく、より根本的な視点から「復興」という〈ことば〉そのものを含めて、シンポジウムを開いてみなさまとともに考えております。孔子は「必ずや名を正さんか」と、正しいことば使いの重要性を説いて、弟子から「迂」、迂遠でまわりくどいと評されました。このように、哲学とは〈ことば〉そのものを扱って現実世界が抱える諸問題と向き合っていく営みです。〈ことば〉を用いる能力にヒトの特性がある以上、それは迂遠と評されながらも人間社会にとって欠かせないものでしょう。今後も本日のようなシンポジウムを通じて議論を深めてまいりたいと存じますので、よろしく願いいたします。

来会者のみなさまにおかれましては、師走のお忙しいなか、最後までおつきあいくださいましてありがとうございました。